

# 慈雲

2号 【前住職追悼号】

2006/03

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@nifty.com

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai



人身受け難し  
今已まてに受く  
仏法聞き難し  
今已まてに受く  
今已まてに聞く

## 【表紙の言葉】

十五年ほど前になる  
でしょうか。

お寺の掲示板を使っ  
て教えの言葉を書こう  
ということになりました。  
た。

その第一弾として前  
住職がみずから筆をと  
って書いてくれたのが  
上の字です。

これは『真宗聖典』の  
はじめのページにもあ  
ります三歸依文の冒頭  
部分です。

受け難い人身を受けた  
ところから

聞き難い仏法を聞いた  
ところから

私たちの聞法の歩みが  
始まります

### 【葬儀委員長挨拶】

本日の門徒葬に際しまして寒さの折からお繰り合わせ御参列を賜りました事はまことに有り難く厚く御礼申し上げます。

故人もお喜びの事と存じます。

ところで聴受院様は大正十三年に東堀川の三条下るで次男として生を受けられ長男亡き後大谷大学に学び出征されました。

その間に新築された本堂は経蔵や書院もろとも強制疎開にあい、あつという間に潰され、ともかく錦小路の民家に移りその後ご縁があつてこの地を得られ念願の本堂を表蔵の場所へ新築されました。

十八歳より法務に勤められたのですが、おでい様（お父様）が亡くなられたところよりお体充分とは申せない状態でしたが二十年間唯々住職として法務を勤められました。

三年前の十一月ついに体はおもいに任せず骨折を繰返されつつ療養されましたが、昨年暮れの十二月三十日午前三時静かにお浄土へお還りになりました。

八十一年の生涯を私達の教化に尽くされた事に御礼を申しますと共に後に続く私達をお浄土より御指導くださることをお願いいたします。 合掌

平成十八年一月十八日

慈雲会会長 中尾金次郎

### 【弔辞】

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よるずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、念仏のみぞまことにておわします。」（『歎異抄』）とまさしくこのお念仏一筋八十年を歩みなされた古刹慈雲山瑞蓮寺第十七世住職浅井春洋師に謹みて申し上げます。不肖私とは学生時代より無二の親友であり、法友でありました。

さて、顧みますれば時局極めて緊迫に伴い、所謂ペンを銃に代える学徒出陣。昭和十八年十月一日学徒徴兵検査猶予停止、同年十月二十五日学徒臨時徴兵検査実施、同年十二月一日入隊、入団、これに先立ち出陣学徒壮行会が各所で催された。

「風は蕭蕭として易水寒し、壮士一た

び去つて復還らず」（燕）荆軻。と時の学長山辺習学先生より御激励を戴き吾等学生は緊張と悲壮感を以つて勇躍壮途に就いたものだった。

君は水戸航空通信学校、私は相模原陸軍通信学校ややして久留米第一予備士官学校に転校、そうこうしているうちに数多の同僚たちは大陸に、南方で、シベリヤで散華されている悲報は復員して判明し痛ましい限りでしたね。

二十年十月母校で再開。心から抱き合つて喜んだものでした。久々ぶりに受講、仏教学（金子先生）真宗学（曾我先生）その他集中講義の鈴木大拙先生、山口益先生等々の御講義ノート等を所望すればいとわず貸してくれましたので大変に助かり感謝していたものだった。勤勉な君は一足先に卒業。

君は田舎の自然を大変愛していたものでした。夏、夕食後若狭白浜海岸を二人でよく散策、空気が美味しいと連発、満天の星空の下海の沖の漁火を輝く海の宝石（ルビー）と表現していた。

今も少し君について語ってみよう。大学では真宗学専攻、とにかくお

念仏が大好きで、私に『歎異抄』を特に学生の時奨めてくれた。君はよく討論はするが争いはしなかった。何か一筆求められると聖徳太子の『十七条憲法』第一条の「以和為貴」とよく認めていた、君の御人柄そのものでしょう。

「観音勢至もろともに

慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも

休息あることなかりけり」

(浄土和讃)

宗祖親鸞聖人さまは娑婆往来八千遍にあやかり御自坊瑞蓮寺に何時でも御戻り下さり御化導賜らん事を…娑婆に残りし同行は師の御教えを守りお念仏の白道をしつかり歩んで参ります。

意は尽くしません以上をもちまして弔辞に代えさせて戴きます。

(抄出)

平成十八年一月十八日

学友 寺澤寛裕

### 【お浄土への道】

仏教に「前念命終・後念即生」という言葉があります。「前念に命終われれば後念に即ち生ず」と読みます。

この命が終わればただちに浄土に往生するという意味です。

親鸞聖人までは、この「命終」は肉体の命が終わること、つまり死ぬことと受け取られていました。それを親鸞聖人は、私たちが本願他力を信じ、弥陀をたのむ一念のおこるときただちにこの迷いの命が終わる(前念命終)、そして、それに続いてすぐに浄土のさとりのいのちがそこに始まる(後念即生)と解釈したのです。

本願他力を信ずるとは教えが聞こえた時であり、それを「信の一念」といいます。一念とは「ひとおもい」というほどの意味です。

その「ひとおもい」に迷いの命が終わるとはいいかえますと自分の限界を知る、限界ある身としての自分を知ることです。その「知る」ということが本願の教えを受けるとということなのです。

親鸞聖人は『愚禿抄』に

本願を信受するは前念命終なり

即得往生は後念即生なり

と解釈されています(『真宗聖典』430ページ)。

私たちは煩惱いっぱいですが、それがなくなつてから浄土に往生するのではありません。煩惱いっぱいの身だと自覚する、煩惱だらけのわが身だと本当に知ることができればそのときが本願の教えを信じ受けとったときであり、そのとき迷いの命がほんとうに終わる、それを「前念命終」、終わると同時にそこにまったく新しい世界が開かれるのです。いかえますとただちに浄土に往生することを得るのです。それを「後念即生」、といわれています。煩惱がなくなつてからではなく、煩惱あるままです。

これほどのご利益、喜びはあるでしょうか。さらに親鸞聖人はそれを「必定の菩薩」と注釈されています。「必ず菩薩に定まる」ということです。教えを聞くとき私たちは前念命終・後念即生というご利益をたまわるだけでなく、菩薩という仏道の求道者の名をたまわります。私たちの聞法生活がそのまま浄土の菩薩の求道生活と同じ意味をもつのであります。喜びであると共に身が引き締まる思いがします。

住職 浅井 仁磨

### 【前御住職を偲んで】

ベルが鳴る。急いで玄関へお出迎え。そこにはパナマ帽を一寸摘みあげ「暑いこととすなあ。」とにこにこご挨拶なさる物静かな紳士。このお方が日常の前ご住職である。

大正生まれのロマンの名残りか帽子がともお好きでトレードマークでもあった。

近年病気をされ退院直後のまだおつらい時分、私が心配しておたづねすると「近頃は医学も進んで上手に手術をしてもらい結構なことですわハハ。」と軽くおっしゃり周囲の皆さんに感謝ばかりで決して不平不満は云われなかった。

あゝこの強さからやさしさは生まれるのだと私はつくづく思う。

激しく変動する今日のご時世しつかりと自分をみつめ直し自らを律し他には優しくを忘れない様、ご住職は説法はなさらずとも態度でお示し下さった。その教えを老後の人生に生かし度いと考える今日此の頃である。

ご冥福をお祈り申して

合掌

原田昌枝

先の御院さんはお参りに来られると挨拶のあと煙草を一服。

それからおもむろに読経にかかかられましたが、全身全霊で仏様を拝まれて、いつも阿弥陀経を力一杯あげて下さいました。実に誠實なお方だなあと思っていました。

読経が終わると世間話をされて又お話しそつに煙草を一服。

お帰りになったあと灰皿に煙草の吸い殻が二本行儀よく並んでいました。

お話にも御態度にもとても品位のある方でした。

小島正子

月日のたつのは早いものであわただしく忙しい十二月、一月も過ぎもつすぐ春梅の花も咲き始めました。

前御住職が私共の月参りに来て頂いておりました頃を思い巡らせて居ります。其の折りによく小さなお孫さんの事を嬉しそつにお話をされてましたことも思い出してあります。

良い跡継ぎ様もお出来になり益々のお寺の御繁栄をお祈りして居ります。

廣瀬壽子

### 【慈雲会総会の御案内】

桃や菜の花の美しい頃となりました。皆様方には日々親鸞聖人の御教えをご聴聞の事とお慶び申します。

このたび春のお彼岸の厳修に引き続いて慈雲会の総会を致したく存じます。

日時 二月二十一日 法話に引続き

議題 平成十七年度の事業報告

平成十七年度決算

平成十八年度の予算

慈雲会葬の報告

その他

お願い

平成十八年度の年会費五千円よろしくお納めください。

皆様が運営する皆様のお寺を目指し、またお寺を通じて広く社会に貢献したいと存じます。

振り替え用紙を同封致しますが、既にお納さめ下さってる方はご容赦下さい。